

## 「蘇軾詩における上・去通押について」訂補

水 谷 誠

## 一

『中國詩文論叢』第十一集に、「蘇軾詩における上・去通押について」と題して、主に聲母（語頭子音）の面から、蘇軾詩の上・去通押の要因を探る小論を載せた。現在、この小論を改めて読み返してみるに、蘇軾の上・去通押詩での韻字をほぼすべて舉げているにもかかわらず、主眼とした聲母面での全面的な検討がなされておらず、もっぱら聲母についての印象的なコメントに終結しているといえる。そこで、今回この場を借りて、蘇軾詩での上聲詩・去聲詩・上・去通押詩……以上ナニナニ詩と述べているものは、それぞれの聲調に該当する場合の換韻句も含めて考える……における全韻字の聲母についてもう一度考えてみることにしたい。

聲母を分類した表（次の表一）を作成してみた。各字母（聲母）の下の数は、その字母に該当する韻字の数である。なお、「上・去通押」の箇所ですで示されるところの数は、／の上の部分が上聲の数であり、／の下の部分が去聲の数である。よって、○／○の上にある「上聲」「去聲」の欄と同じ形式で記されている数は、／における上聲・去聲の数を合計したものである。<sup>(1)</sup>

以上見た表一を各字母ごとに事細かにこたわっては前回の轍を踏むだけであるので、今回は全清・次清・清・全濁・次濁という大きな枠ごとに注目していきたい。しかも、よりわかりやすくするために、この大きな枠を比率化してみることにする。上聲詩・去聲詩・上・去通押詩における全清・次清・清・全濁・次濁の占める比率を％で表すことにする。な

表一

	清	次	清	全	清	清濁
澄 定 群 母 母 母	曉 影 生 心 非 母 母 書 母 數 母	初 清 滂 徹 透 溪 昌 母 母 母 母 母	莊 精 幫 知 端 見 章 母 母 母 母 母			字 母
4 8 6	57 27 97 47 19	18 43 14 16 18 86	49 86 31 11 40 86			上聲
5 23 8	17 29 25 26 9	11 5 9 0 14 31	16 18 17 13 14 64			去聲
17 34 14	31 35 36 39 12	16 23 8 3 18 36	39 44 25 9 27 74			上去 通押
4 16 1 // // //	21 12 24 11 4 // // // //	4 10 2 2 8 13 // // // // //	21 29 7 4 9 28 // // // // //			上去 通押
13 18 13	10 23 11 18 8	12 13 6 1 10 23	18 15 18 5 18 46			
						清濁
次 濁			全 濁			字 母
日 來 羊 于 微 明 泥 疑 母 母 母 母 母 母 母			匣 常 崇 邪 從 奉 並 母 母 船 母 母 母 母			上聲
51 117 32 77 39 52 26 46			31 16 2 3 9 6 2			去聲
3 29 12 7 10 29 5 22			30 11 3 1 16 5 10			上去 通押
22 63 11 29 23 42 21 40			50 23 16 15 27 8 14			上去 通押
17 23 7 21 10 14 8 20 // // // // // //			21 7 7 8 7 2 7 // // // // // //			
5 40 4 8 13 28 13 20			29 16 9 7 20 6 7			

表二

	上 聲 詩	去 聲 詩	上=去通押詩	(上聲)	(去聲)
全 清	24	26	23	24	23
次 清	15	13	11	10	12
全 濁	19	19	16	18	13
次 濁	7	20	23	20	26
	35	21	27	29	25

(%)

「蘇軾詩における上・去通押について」訂補(水谷)

お、上「去通押詩については、さらに上聲・去聲ごとに分けてそこでの比率を見ることにしたい。この分けたそれぞれの比率は、(上聲)(去聲)の下の欄に示す数である。

まず、表二での順にならって、全清・次清・清という清音内での比率について見てみたい。これらの比率は、上聲詩・去聲詩・上「去通押詩のいずれの場合でも、ほぼ同じになっている。つまり、上記のどの聲調の詩でも、清音韻字の出現する比率は50〜60%とほぼ同じであるといえるのである。

ところが、全濁・次濁に関しては、上聲詩と去聲詩・上「去通押詩とは様相を異にする。去聲詩と上「去通押詩での全濁・次濁の比率は、それぞれ全濁が約20%、次濁が約20〜30%となっており、ほぼ同じであるといえてよいであろう。

しかし、もう一方の上聲詩については、全濁の方が7%と極端に少なく、また次濁は35%とかなり突出した数になっている。このうち、次濁が35%と増えているのは、表一からもわかるように「來母・于母」での用例数の多さによるものである。この「來母・于母」によって、上聲詩における聲母面での特殊性を強調することはできないであろう。たまたま、

「里・雨・老・有」などの文字が、蘇軾詩において韻字として好まれて用いられた結果にすぎないと考えられるからであ

る。

それよりもむしろ、上聲詩において、全濁聲母がかなり少ない点に注意してみたい。また、逆の面から、少数にもかかわらず上聲詩に上聲全濁聲母が韻字に用いられていることにも注意をはらいたい。このように述べるのは、『廣韻』(澤存堂本)をいわゆる中古音の枠組みを代表するものとして見るに、これまで述べてきた上聲全濁聲母は、『廣韻』での枠組みにおいて上聲全濁聲母となるからである。というのは前稿でも述べたように、北宋の蘇軾の時代において、全濁聲母をもつ上聲の文字は去聲に變化していたと推定されているからである。したがって、蘇軾詩において、上聲詩を考える場合に、全濁聲母を含むものと含まないものとに分けて考える必要があるといえる。つまり、全濁聲母を含む上聲詩は上「去通押詩に準ずるものとして、また、全濁聲母を含まない上聲詩は純粹な上聲詩として扱いうる可能性があることになるであろう。この点についての考察を経た上で、改めて蘇軾の上聲詩での聲母について考えてみたい。

## 二

最初に、上聲詩(百八首)と上聲のみの換韻句(九十五例)

を、韻字に全濁聲母を含むものと含まないものとに分けてみたい。

全濁聲母を含む上聲詩……………三十九首  
 全濁聲母を含む上聲換韻句……………二十二例  
 全濁聲母を含まない上聲詩……………六十九首  
 全濁聲母を含まない上聲換韻句……………七十三例

ところで、全濁聲母を含まない上聲詩・上聲換韻句については、たまたま全濁聲母の文字が韻字に用いられなかった可能性がある。特に、二韻・三韻といった短い換韻句においては、たまたま全濁聲母がなかったという偶然性は決して低くないといえる。本来ならば、この点も考慮に入れつつ考察を進めるべきであるが、偶然であるか否かの認定は困難であるため、上記の結果のままで考察を進めることにする。

そこで、表一に依りつつ、上聲詩における全濁聲母を含むものと含まないものとに分けた形で、各字母ごとの韻字の使用数を次の表三にまとめてみた。

次に、ここでも表二と同様に、全清・次清・清・全濁・次濁ごとの比率表を作ってみた。これが表四である。この表

「蘇軾詩における上・去通押について」訂補（水谷）

表三

清					次 清					全 清					清濁				
曉 母	影 母	生書 母	心 母	非敷 母	初昌 母	清 母	滂 母	徹 母	透 母	溪 母	莊章 母	精 母	幫 母	知 母	端 母	見 母	字 母		
															あり全濁				
23	8	32	25	7	5	13	10	8	5	34	17	27	10	4	15	41			
															なし全濁				
34	19	65	22	12	13	30	4	8	13	52	32	59	21	7	25	45			
次 濁					全 濁											清濁			
日 母	來 母	羊 母	于 母	微 母	明 母	泥 母	疑 母	匣 母	常 母	崇船 母	邪 母	從 母	奉 母	並 母	澄 母	定 母	群 母	字 母	
																			あり全濁
21	43	15	25	8	13	7	21	31	16	2	3	9	6	2	4	8	6		
																			なし全濁
30	74	17	52	31	39	19	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

四で注意を引く點は、全濁聲母を含む上聲詩での各清濁ごとの枠の比率が、去聲詩・上・去通押詩での比率と大きく變わ

表四

		全濁あり	全濁なし
全 次 清 濁	清	22	25
	清	14	16
	清	18	20
	濁	17	0
全 次 清 濁	濁	29	38

(%)

らない点である。すなわち、全濁聲母を含む上聲詩は、聲母面で去聲詩・上<sub>レ</sub>去通押詩と同じような傾向をもつといえよう。よって、全濁聲母を含む上聲詩は、上<sub>レ</sub>去通押詩とほぼ同じ性格をもち、實質上<sub>レ</sub>去通押であつたといえよう。

一方、これに對して、全濁聲母を含まない上聲詩では、「全清・次清・清」の清音の比率は、他の去聲詩や上<sub>レ</sub>去通押詩さらには全濁聲母を含む上聲詩ともあまり變わりない。つまり、全濁聲母を含まない上聲詩においては、比率の上では全濁聲母のない分を次濁聲母に多くは置き換わっているだけであるといえよう。

そこで、使用頻度の高い清音韻字に注目して、上<sub>レ</sub>去通押詩・全濁聲母を含む上聲詩・全濁聲母を含まない上聲詩のそれぞれに見える上聲清音の韻字について少しばかり見てみた。ここでは、三例の韻字を擧げてみることにする。なお、この三例は、多くの使用例がある場合に限った。

○水(書母)……三十五例

上<sub>レ</sub>去通押詩……………四例

全濁聲母を含む上聲詩……………七例

全濁聲母を含まない上聲詩……………二十四例

○子(精母)……三十四例

上<sub>レ</sub>去通押詩……………五例

全濁聲母を含む上聲詩……………五例

全濁聲母を含まない上聲詩……………二十四例

○酒(精母)……二十四例

上<sub>レ</sub>去通押詩……………九例

全濁聲母を含む上聲詩……………五例

全濁聲母を含まない上聲詩……………十例

以上の三例のみであるが、これらの清音の韻字が、上<sub>レ</sub>去通押詩・全濁聲母を含む上聲詩・全濁聲母を含まない上聲詩のそれぞれに、多少の増減は認められるもののコンスタントに見えることが確認できるのであろう。ただし、この三例での増減のうち、全濁聲母を含まない上聲詩においてこの三例とも最も多い数となっていることにおいて、ある程度上聲詩としてのまとまりがあつた可能性があるといえよう。この點

で、全濁聲母を含まない上聲詩の数が多かったことと對應する事例であるといえよう。しかし、いずれの三種類の詩においても上聲清音聲母の韻字が共通に見えることから、清音の聲母が上 $\parallel$ 去通押の要因となりうる可能性は低いであろう。こうしてみると、前稿において、「改・海」などの韻字が上 $\parallel$ 去通押の一要因であるかのごとく述べているのは、誤りであるといえるであろう。<sup>(3)</sup>

以上の考察を通じて、……上聲全濁聲母の文字の去聲への派入というケースを除いて……上 $\parallel$ 去通押における聲母を要因とする考え方は、かなり困難であるとしてよいであろう。このほかに考えられる要因としては、まず韻母とする考え方があがるが、これについては、平 $\parallel$ 上・平 $\parallel$ 去の通押詩がほとんど見えないことから、このような見方に注意を向ける必要はないであろう。残るは、聲調の調値が、上聲と去聲とではお互いに近かったとする考え方がありうる。そこで、次節でこの点について考えてみよう。

### 三

以上の考察の結果、上 $\parallel$ 去通押を許容する要件として消去法的に残ったものが、聲調を要因とするものである。すなわ

「蘇軾詩における上・去通押について」訂補（水谷）

ち、北宋期の上聲と去聲の調値が互いに近かったと考える方である。もし、この考え方が支持されるならば、上 $\parallel$ 去通押詩ばかりでなく、上聲全濁聲母を韻字に含む上聲詩をも無理なくその存在理由を説明できることになる。つまり、上聲・去聲の調値が近いために、多数の上 $\parallel$ 去通押詩があるのである。逆に、調値の互いに隔たった平聲や入聲にまたがる上聲詩や去聲詩がないことの説明にもなるのである。以上のごとく矛盾の少ない見方であるが、前稿・本稿でこれまで挙げてきた蘇軾詩での韻字例のみによって説明しようとするには、あまりにも不十分な論據でしかないであろう。本質的に北宋當時の調値に迫るものでなければ、上 $\parallel$ 去通押詩が成立する要件として調値説を採るわけにはいかないのである。

そこで、當然北宋期での聲調調値……できれば絶対調値に肉薄したもの……に論及しなければならぬのであるが、北宋當時の中國人にとってあまりにも自明無自覺のことであつたためか、調値に關する記述は管見のかぎりほとんどないといえる。ほんのわずかであるが、日本において研究業績が数えられる。今、これを利用して、蘇軾詩における上 $\parallel$ 去通押の要因を調値の面から見てみたい。そして、その研究業績は一人は朝山信彌氏であり、もう一人は頼惟勤氏である。

最初に、朝山信彌「古代漢音における四聲の輕重について」<sup>(4)</sup>という論考に注目してみたい。ここでは、東山御文庫本『作文大體』『第八韻音』において、「上聲之重」と「去聲・去聲之輕」と「上聲」、というこのそれぞれペアとなる間で音調上の差違が認められなかったと思われる記述があることから、近世中國語に到るまでの諸聲調について考察を進めている。ところで、本稿で参照する上での利點として、『作文大體』の依った聲調が……地域については特定できないが……唐末五代に當たることを思えば、蘇軾詩における上聲・去聲のそれぞれの調値の親近性についての一例となりうるであらう。

次に、現代の中國語方言についての研究であるが、過去への遡及性が論文内にあるため是非参照したいものに、賴惟勤「丹陽方言と日本漢字音との聲調について」<sup>(5)</sup>がある。中國語の一方言である丹陽方言の口語層に、中古音韻分類を基としての上聲と去聲とが二つのグループに分かれており……これを本稿では便宜的に、上聲輕・上聲重・去聲輕・去聲重とする……上聲輕と去聲輕、上聲重と去聲重のそれぞれの調値が同じになっているという。この點で、上聲と去聲が調値において融合している方言があり、しかもこのようになったのは

この方言の祖語に當たるものからの影響であると考えられることから、重要な論文であるといえよう。

以上の二論文はともに綿密な考證を経てきており、本稿のここでのように簡畧扱うのはなはだ失禮であるが、とりあえずここで簡単に紹介した上で、この二論文に見たような上聲と去聲の調値の融合現象と蘇軾詩での上「去通押」とをそのまま結びつけて考えられるか否かについて述べてみたい。まず、蘇軾詩において、上聲詩の中で全濁聲母の韻字をもたない上聲詩が一定數あることから、全濁聲母を含まない上聲群……前述の上聲輕……は、ひとまとまりの聲調をなしていた可能性があると見える。さらに、上「去通押詩の中で、……全濁聲母が上聲・去聲のどちらに出でくるか特に問題にしないが……全濁聲母の韻字を含まない上「去通押詩ほとんどないことから、上聲輕と去聲輕とが同じ調値になっていたと考えない方がよいであらう。したがって、蘇軾詩においては、上聲と去聲の調値は一部において共通點があり、その共通點が親和力となり、上「去通押を許容していたとするのが妥當であらう。<sup>(6)</sup>そして、その共通點の一例として、賴惟勤「漢音の聲明とその聲調」<sup>(7)</sup>を挙げてみたい。その論考で示される圖において、上聲を微上昇型、去聲を強い上昇型となっている。

つまり、天台聲明に保存されている調値は、上聲と去聲には上昇型という共通点があることになる。そして、恐らく蘇軾詩においても、同じような性格の共通部分が上聲と去聲にはあったと考えたい。その共通点が、上昇型であるか、それとも下降型であるか、さらには平板型であるのかまでは不明であるとしても、聲調に何らかの共通部分があったために上<sup>8</sup>去通押が生じたと考えざるをえないであろう。

#### 四

以上、蘇軾詩において上<sup>8</sup>去通押が生じた要因を當初は聲母面から探ってみたが、結果としては上聲・去聲の聲調の調値の共通性に主たる要因を求めざるをえないということになった。北宋において上<sup>8</sup>去通押詩が、蘇軾に先行する詩人にも見えることから、これまで見てきたような上<sup>8</sup>去通押詩が出でくる要因を一詩人の嗜好に求めることはできないといえる。やはり、何らかの共通点があったために、聲調を越えた通押が許されたのである。中國古典詩の規範を考える上で、用韻の問題の占める部分は決して小さくないといえるであろう。その用韻の部分においても、北宋期において中古音の枠組みに収まりきらなくなった變化をここで見るようになった

「蘇軾詩における上・去通押について」訂補（水谷）

といえよう。<sup>(9)</sup>

#### 〔注〕

- (1) 表一での各字母名については、前稿「蘇軾詩における上・去通押について」で使用したものを原則として踏襲している。このため一部字母では合併されているが、これはそのためである。また、全清・次清のほかに「清」を新たに設けたが、全清（無氣音）・次清（有氣音）を特に分割しなかったために、無氣・有氣に分けられない残った清音を「清」としたのである。

- (2) 當然、ここで問題とする清音の場合、聲調の調値にも言及すべきであるが、この点については三でするのでここでは特に問題にはしない。また、以下の三例の韻字の調査も本來的に不要なものであるが、前稿の執拗なまでの聲母にこだわった反省から、こだわっても有益な結果がもたらされないこと最終的な確認をせんがためにしているのである。以上の理由により、次濁での分析は省略する。

- (3) 上聲詩において、「改」は一例もなく、「海」は二例のみである。ただし、上<sup>8</sup>去通押詩においても、「改」は三例、「海」は五例といたって少ない用例数である。このような少数例で上<sup>8</sup>去通押詩の要因とするには、それなりの特徴がなければならぬが、この二韻字にそれを求めることはできないであ



## 中國詩文論叢 第十三集

ろ。

- (4) 『國語・國文』第十一卷第十一號。一九四一年十一月。今、『朝山信彌國語學論集』(和泉書院 一九九二年十月)による。

- (5) 『お茶の水女子大學人文科學紀要』第五卷。一九五四年九月。今、『賴惟勤著作集―中國音韻論集』(汲古書院 一九八九年二月)による。

- (6) つまり、上記二論文に見える現象のように、上聲・去聲の調値が同じになってしまっているところまでは、ここでは考えないでおきたい。最も、上聲・去聲の調値が同じになるという例は、その二聲調の近親性を説明するのに力があるといえる点で重要である。

- (7) もと『言語研究』第17・18合併號。一九五一年三月。今、『賴惟勤著作集―中國音韻論集』(前掲)四〇二頁での圖による。

- (8) たとえば、蘇軾よりも一世代前の歐陽修にもしばしば上||去通押詩が見える。『歐陽永叔集』(國學基本叢書本)で卷數・詩題の一部を挙げてみる。

卷二「初伏日招王幾道小飲」

卷四「飛蓋橋翫月」「寄生槐」

卷五「述懷」

卷六「感興 其三」

以上は、とりあえず目に付いたものだけを拾ったものであ

る。

- (9) 文末注の形で大變失禮であるが、前稿についてコメントとして、聲母面よりむしろ聲調面を重視すべきではないかという平山久雄先生からの返信があった。本稿もこれによるところが多い。今回このような改稿のきっかけとなったことに對するお禮をここで申し上げたい。